

バイリンガルの子どもの言語獲得・発達

山本雅代 (関西学院大学 国際学部教授)

赤ちゃんはなぜ可愛いのか？

それは、赤ちゃんは人をしてそう思わせるようにできているからだと考えたのは動物行動学者のコンラート・ローレンツであった¹⁾。70年も前のローレンツのこの考えが、現在なお学界で支持されているか否か、門外漢の筆者にはわからないが、確かに、丸く突き出した大きなおでこ、その下に並ぶクリクリとした大きな目、短く寸胴で柔らかな手足に丸みを帯びた体躯。そんな赤ちゃんの姿に私たちは愛らしさを感じざるを得ない。

同じ問いを、言語という観点から発してみると、それは、赤ちゃんは生まれて直ぐには「しゃべらない²⁾」からだと言ってみたくなる。「しゃべらない」ことで、ローレンツの言う形状的特徴によってもたらされる赤ちゃんの愛らしさが増強されるわけではないが、この「寡黙な」(この際、産声をあげることは問わないことにして)誕生の仕方のおかげで、赤ちゃんは愛らしさを損なわずにすむ。もし生まれ出た途端に「お～い、メシ！」などと声を張り上げる赤ちゃんがいれば、その愛らしさはすぐにもはげ落ちてしまうことであろう。

閑話休題。もちろん、赤ちゃんが生後すぐに「しゃべらない」のは、そんなことのためではない。認知心理学者のスティープン・ピンカー³⁾によれば、赤ちゃんが誕生と共に「しゃべらない」のは、要は、人が言語を獲得するにあたっては、一つには「しゃべる」前に「聞く」ことが必要であり、二つには小さな単位(音素)からより大きな単位(語、文など)へと追うべき発達の順序があるが、その一連の過程を誕生までに済ますことができないからということのようである。

ピンカー⁴⁾はこんなことも言っている。

人間の赤ん坊は、脳の組み立てが完成するまえに子宮から追い出されている可能性が高い。(中略)他の霊長類が寿命の何パーセントを胎内で過ごすかということから、人間の場合を比定すると、一八ヶ月で生まれていい計算になる。赤ん坊が単語をつなぎはじめる時期ではないか。一八ヶ月も胎内にいたとしたら、しゃべりながら生まれてきたかもしれないのだ！

「お～い、メシ！」と言うかどうかは別として、ず

いぶんと印象の異なる誕生の瞬間となる。

理由はともあれ、子どもは誕生前に胎内で言語の獲得を済ませてしまうわけではないので、私たちはその言語の獲得・発達の様子を順を追って観察する機会を得ることができる。

子どもの言語獲得・発達では個人差が大きいことはよく知られた事実であるが、それを度外視して、「一般的な」言語獲得・発達の行程を追ってみれば、子どもは生後6ヶ月前後で「アー・ウー、アー・ブー⁵⁾」などと喃語を発し、8～12ヶ月ほどで「ブンブン(飛行機)」というように何かを意味しているらしいことがわかる(1語文)を使い始める。続いて、上にもあるように18ヶ月頃になると複数の語を一連の連なりとして発話し出し、最初は「パパゴホン(パパの本)」のように2つの語(2語文)を、続いて3つの語(3語文)を…と、連なる語の数を増やしていく。

筆者が関心を寄せるのは、こうしたことを複数の言語に跨がって行っている子どもたち、すなわちバイリンガル⁶⁾の言語獲得・発達と言語使用である。子どもは、どのような言語環境のもとに、いかにして複数の言語を獲得し、それらをどのように使用しているのだろうか？ というのが筆者の最大の関心事である。バイリンガリズムの研究分野では、こうした言語の獲得を、2つの言語を同時に獲得し、第1言語を2つ持つという考えの下に、「第1言語としてのバイリンガル言語獲得」(BFLA=Bilingual First Language Acquisition)、こうした環境で言語を獲得するバイリンガルを「同時バイリンガル」(Simultaneous Bilingual)などと呼んでいる。

同時バイリンガルの第1言語としてのバイリンガル言語獲得の、一体、何がそんなに面白いのか。このタイプの言語獲得も、ただ1つの言語がかかわるモノリンガルの言語獲得も、たとえば(音声言語の場合)音で表される記号と、その記号同士を結びつける規則の体系を獲得するという意味では違いはなく、また上記に示した言語獲得・発達の行程もほぼ同様であるが、前者では獲得の過程で子どもが対峙する言語が複数あるということ、その点において前者は後者と決定的に異なっている。当たり前のことを述べているようであるが、このことは極めて重要なことを意味しており、そこに面白みがぎっしり詰まっているのである。

この面白みの元となる重要なことの一つに、子ども

は早い段階から言語を客体化することができるということがある。別の表現を借りれば、メタ言語能力の発達が早いということを意味している。メタ言語能力というのは、単に言語を意思伝達的手段として使用するだけでなく、言語そのものについて考えたり、語ったりすることのできる能力とでも言ったらよいだろうか。この能力は、大人は誰でも持っており、モノリンガルの子どもも、むろん長じるに従い発達させていくものであるが、複数の言語を獲得する子どもは、とりわけ同時バイリンガルの場合、常に複数の言語と接しており、それらを対比しうる、あるいはせねばならない環境に身を置いていることから、この能力の早期発達が促進されると考えられている。

子どもが早い段階で、言語について考えたり、語ったりすることができるということは、子どもは、実は大人が思うよりも遙かに多くのことを考え、また知っているのだということを、その言語獲得の過程で、我々に、直截に知らしめてくれる可能性があるということである。そして実際に多々、興味深いことを教えてくれるのである。

そのいくつかを例⁷⁾を示しながら紹介したいと思う。

— ① —

女兒：＜母親に向かって＞ おさかなすきね。

母親：Tell Daddy. [お父さんに言ってごらん.]

女兒：＜父親に向かって＞ Fish, fish, fish, … おさかな … like it. [さかな, さかな, さかな, … おさかな … それすき.]

＜ ＞：会話の場面などの説明， []：筆者による和訳

これは母親が日本語母語話者、父親が英語母語話者の家庭に育つ 26 ヶ月になる日本語-英語同時バイリンガル女兒と母親との会話である。日本語で母親に話しかけたところ、母親から、(同じことを)お父さんに言ってごらんと促され、英語に切り替えて父親に話しかけている場面である。この会話から、女兒は、あることを表現するのに複数の仕方があり、また複数あってもかまわず、自分の両親はそれぞれに違った仕方をういており、各々の仕方に自分のそれを合わせるとうまく話が伝わることも知っていて、加えて、どちらの親にどの仕方をういけばよいのかをもわきまえていることがわかる。こうした例は諸外国の研究⁸⁾でも数多く報告されている。

この会話はもう一つ、興味深いことを私たちに教えてくれている。このように対話相手の話す言語に応じて自分が話すべき言語が選択できるということは、すなわち子どもは言語の区別ができているということである。幼い頃から 2 つの言語で育てると、

子どもは言語の区別がつかなくなり混乱すると言われることがあるが、親の方が言語の区別ができず混乱しているのでなければ、その心配は無用。ちなみに、相手に応じた言語の話分けに先駆けて、聞いて区別できる年齢はさらに低く、早くも生後 4 ヶ月頃には音素⁹⁾や韻律¹⁰⁾の特徴を手がかりに言語の聞き分けができることもわかっている。

— ② —

母親：X ちゃん <女兒の名前>, ピッピッ.

女兒：Milk. [ミルク.]

母親：これ, なあに? これ, なあに?

女兒：ミーク.

母親：うん?

女兒：ミーク.

女兒：ミーク? ミーク? ふ～ん.

父親：X, X, what's this? [X, X, これは何?]

女兒：Milk! [ミルク!]

父親：Oh, really. [へえ, そうなんだ.]

これは、先の女兒が 27 ヶ月の時に両親と交わした会話である。英語の “milk” の発音とそれを日本語読みににしたカタカナ発音の「ミーク」とを、会話の相手になっている親ごとに明瞭に使い分けていることがみてとれることと思う。

さらに、もう少し年齢があがると、音の区別だけでなく、言語表現に伴う意味内容にまで踏み込んだ区別ができ、またそのことを明示的に語れるようになる。次も同じ女兒による例である。

ある朝、女兒が、母親に「X, <今いる場所に> じっとしてな」と言われたのにもかかわらず、ちょこちょこその母親の後について行ってしまった。以下はそれを見た父親とこの女兒の交わした会話である。

— ③ —

父親：X, stay over there. [X, そっちにいなさい.]

女兒：「じっとしてな」is not “sit over there.” It means “be still.” [「じっとしてな」は「そっちで座ってなさい」とは違うよ。「じっとしてな」という意味だよ.]

父親：It's the same thing. [同じじゃないか.]

女兒：Not! “Stay” is not 「じっと」. [違うよ!]

「いなさい」は「じっと」とは違うよ.]

[]：日本語の語の引用, “ ”：英語の語の引用

母親が日本語で述べたことも父親が英語で言い換えたことも、語用論的に言えば、どちらも「動かずにそこで待っていなさい」ということで同じだが、この女

児は、各語の意味を言語ごとに意味論的に厳密に解釈すれば、両者は異なった意味内容を持っているのだと堂々抗議している。少々へりくつ気味の女児の抗弁に思わず笑みがこぼれるが、同時バイリンガルのメタ言語能力が明示的に表出されたものとして、この例はきわめて重要なことを我々に示すものとなっている。

さて、ここまで2つの言語を年齢相応に話す同時バイリンガルの発話を例として、バイリンガルのメタ言語能力の発達について紹介してきたが、最後に、同時バイリンガルについて誤解を招かないよう、いくつか注釈を加えておきたい。

まず一つには、同時バイリンガルは、先に定義したように2つの言語を同時に獲得する者を指すが、それは必ずしも文字通り、寸分違わず「同時に」というわけではないことである。たとえば、子どもが一方の言語と接触する時間（量）が他方の言語と接触する時間（量）よりも少なくなる時期があれば（通常、ある）、前者の言語の発達が足踏み状態で停滞あるいは後退、ついには喪失することもありうる。しかし改めて、その言語との接触時間（量）が確保されたり、増えたりすれば、足踏みしていた発達が早い速度で進んだり、あるいは喪失状態にあった言語が回復したりする可能性が高い。シーソーのような状態で交互に発達を進めることは決して珍しくないことである。

二つには、「同時に」は必ずしも「同等に」を意味するわけではないことである。同時に2つの言語を獲得しうる環境にいる子どもでも、言語ごとの接触量の多少や接触の仕方、あるいはその環境における言語間の威信性や重要度の差異など様々な要因によって、子どもが当該言語をどう獲得するかには違いが見られることがある。たとえば、両方の言語について、年齢相応に話し、聞いて理解する者がいる一方で、年齢相応に話すのは一方の言語のみで、他方の言語については聞いて理解はするが（ほとんど）話さないという者もいる。後者のようなバイリンガルは「受容バイリンガル」(Receptive Bilingual) と呼ばれているが、実は、こちらも決して珍しい存在ではないことが複数の調査¹¹⁾で報告されている。

「同時バイリンガル」が必ずしも両方の言語を文字通り、寸分違わず「同時に」、また「同等に」獲得し発達させるわけではないということは、その呼称故になかなか理解しにくいことかもしれない。とりわけ、一方の言語について、理解はするが、（ほとんど）話さないというバイリンガルのケースはそうであろう。しかし、そのようなバイリンガルも複数の言語に接していることに違いはなく、両方の言語を年齢相応に話す同時バイリンガルと同様に、言語について、大人が想像するよりも遙かに多くのことを考え、また

知っている。

その例の一つ紹介しておこう。この例の女児はハワイで生まれ育つ受容バイリンガル（発話録音時4歳3ヶ月）で、英語については年齢相応に話し、理解するが、日本語は母親の話す内容の大半は理解するものの、話すことは年齢相応のレベルにはなく、きわめて限定的である。母親の母語は日本語であるが、英語が流暢な日本語-英語バイリンガル、父親は英語を母語とするモノリンガル、兄の母語も英語であるが、必要に応じて日本語でも対話ができる英語-日本語バイリンガルである。母親は、ほとんど日本語を話さないこの女児が少しでも日本語を話すようになればと願い、日本語に触れる環境を与えるべく、機会あるごとに日本語で話しかけるよう心がけている。

— ④ —

母親：だって 日本語のお話ししないじゃん 今日
は ぜんぜん お兄ちゃんも英語でしゃべっ
て Y〈女児の名前〉。

兄：Yeah? [そうお?]

女児：Oh, yeah, but I listen to you. No worry.

This is purple ….

[あら、そうお、でもおかあさんの言っている
ことはちゃんと聞いてるよ。心配いらないよ。
これはむらさき色 ….]

上述の通り、この女児は英語が優勢な受容バイリンガルで、日本語は理解するものの、話すことは限定的で、日本語で語りかける母親ともなかなか日本語で会話を交わすことがない。それでも、この女児は、母親が自分に日本語を使って話して欲しいと願っていることを十分承知している。なかなか日本語で話してくれないのではないかと、冗談半分にこぼす母親に対して、この女児は、少々「とぼけた」調子で上記のような返答を返している。2つの言語を同等に話すわけではないが、この女児もバイリンガルである。バイリンガルとしての一家言はちゃんと持っているのである。

近年、グローバル化のかけ声と共に、世界では威信性の高い単一言語による言語の独占化が進んでいるように見えるが、現実には、そのことによって世界がモノリンガル化しているというわけでもなさそうである¹²⁾。それは、世界各地で人々が、自分の母語に加えて、第2、第3の言語を習得したり学んだりしていることによるものと思われるが、それと共に複数の言語を同時に獲得しうる環境に生まれ育つ子どもが増加していることの反映でもあろう。

日本でもそうした子どもは今後さらに増えることは疑いない。しかし、残念なことに、日本におけるバイ

リングリズムの研究者、とりわけ複数の言語を同時に獲得する第1言語としてのバイリンガル言語獲得を研究しようという研究者、また研究そのものも極めて少ない。

そんな侘しい研究分野ながら、筆者の拙文を通して、バイリンガルリズムの研究は実に魅力に富んだものだというところを、多少なりとも読者の皆さんにお伝えできたのであればよいが…と願いながら、本稿を閉じることにしたい。

〔注〕

- 1) 岸本渉【2002.「動物の幼児図式に関連する特性が援助要請の原因帰属及び援助行動に与える影響」.『対人社会心理学研究』,第2巻,pp.103-110】、正高信男【2004.「ローレンツ『ソロモンの指輪』:動物行動はボトムアップ型である」.池内了(編著)『これだけは読んでおきたい科学の10冊』(pp.87-102).東京:岩波書店】等を参考。
- 2) 本稿では音声言語についてのみ語っている。
- 3) ピンカー、スティーブン【1995.『言語を生み出す本能(下)』.(椋田直子訳).東京:日本放送出版会】p.92より引用。
- 4) 同上。
- 5) ここにある発話例(カタカナで記載しているもの)は、岩淵悦太郎、波多野完治、内藤寿七郎、切替一郎、時実利彦、沢島政行、村石昭三、滝沢武久【1968.『ことばの誕生:うぶ声から五才まで』.東京:日本放送出版協会】pp.18-22, p.110より引用。
- 6) 本稿では3つ以上の言語を獲得するマルチリンガルも便宜的にバイリンガルに含めている。
- 7) 本稿で紹介している例の①, ③は山本雅代【1991.『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』.東京:明石書店】pp.104-105より引用。②, ④は山本が収集した音声データより。なお④は科研費(平成21年度~23年度:課題番号21520421及び平成24年度~26年度:課題番号24520594)の助成による研究で収集したもの。
- 8) たとえばGenesee, F., Nicoladis, E., & Paradis, J.【1995. Language differentiation in early bilingual development. *Journal of Child Language*, 22, 611-631】、またGenesee, F., Paradis, J., & Crago, M. B.【2004. *Dual language development & disorders: A handbook on bilingualism & second language learning*. Baltimore: Paul. H. Brookes】。
- 9) Eilers, R. E., Gavin, W.J., & Oller, D. K.【1982. Cross linguistic perception in infancy: The role of linguistic experience. *Journal of Child Language*, 9, 289-302】参照。
- 10) Bosch, L., & Sebastián-Gallés, N.【2001. Early language differentiation in bilingual infants. In J. Cenoz & F. Genesee (Eds.), *Trends in bilingual acquisition* (pp.71-93). Amsterdam: John Benjamins】参照。
- 11) たとえば, Billings, M.【1990. Some factors affecting the bilingual development of bicultural children in Japan. *AFW Journal*, April, 93-108】、Noguchi, M. G.【2001. Bilinguality and bicultural children in Japan: A pilot survey of factors linked to active English-Japanese bilingualism. In M. G. Noguchi & S. Fotos (Eds.), *Studies in Japanese bilingualism* (pp. 234-271). Clevedon: Multilingual Matters】、Shang, S.【1997. Raising bilingual/bicultural children in Kyushu: A survey. *Research Bulletin of Kagoshima Women's College*, 18(2), 43-58】。
- 12) デイヴィッド・グラッドル【1999.『英語の未来』(山岸勝榮訳).東京:研究社】。

〔筆者プロフィール〕

山本 雅代 (やまもと まさよ)

関西学院大学・国際学部教授/言語コミュニケーション文化研究科教授。国際基督教大学博士後期課程修了、教育学博士/Ph.D。専門はバイリンガルリズムで、特に、生後直後から2つの言語を第1言語として獲得し始める同時バイリンガルの言語の獲得・発達・使用、またそうした子どもが育つ家庭や社会の言語環境を研究の対象としている。第1言語としてのバイリンガルリズム研究会会長、異文化間教育学会常任理事。主な著書に『バイリンガル』(1991, 大修館書店)、『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』(1996, 明石書店)、*Language Use in Interlingual Families: A Japanese-English Sociolinguistic Study* (2001, Multilingual Matters)。また編著書・編著として『日本のバイリンガル教育』(2000, 明石書店)、『バイリンガルの世界』(1999, 大修館書店)等がある。主要論文には What makes who choose what languages to whom?: Language use in Japanese-Filipino Interlingual families in Japan (2005, International Journal of Bilingual Education and Bilingualism)、Language use in interlingual families: Do different languages make a difference? (2008, International Journal of the Sociology of Language)、「受容バイリンガルの言語使用」(印刷中、『言語と文化』第16号, 37-46)等。